

## 地域の伝統文化「松明・松明まわし」に 子ども達と携わって

理事 高橋 正光



私が生まれ育った旧砂川町（昭和38年に立川市と合併）には、全国的に見ても大変珍しい先人の遺徳である文化的伝統行事の「松明・松明回し」があります。お盆の行事「迎え火（7月14日）・送り火（7月17日）」の一つで、いわば、先祖の霊が道に迷わないで行き来できるようにと、昭和30年（1960年）代中頃まで、各家庭の子どもから大人までが庭先や五日市街道に出て「松明回し」が行われておりました。夕暮れ時になると各家々では松明を作り、こぞって「松明回し」を行い、町を東西に走る街道は松明の炎で赤く染まりました。しかし、町の発展と共に車の往来も激しさを増し、麦を栽培する農家も少なくなり、昔ながらの「松明回し」は自然消滅を余儀なくされました。そこで、このような他に類を見ない貴重な伝統文化を後世に伝承保存していこうと、平成6年の夏、当時、市の青少年健全育成地区委員会に携わっていた関係で松明伝承部会を設置、その後、平成19年に独立し立川市西砂川松明伝承保存会を創設、同年「松明・松明回し」は市の二つある無形民俗文化財の一つに認定され、同時に会は文化財保持団体として現在に至っています。



松明まわし

会では、活動の一環として青少健地区委員会を中心に、各学校及びPTA・各種団体の方々と協力し、夏に「ふれあい松明祭」を開催、早いもので、今年で22回目を迎え、今では夏の風物詩として多くの子ども達が毎年楽しみにしている一大行事に発展し、平成23年には東京都の「心の東京革命」でモデル事業として表彰されました。

祭りでは40~50個の松明を我々伝承保存会が作り、迎りが暗闇に包まれる頃、メインイベントとして「松明回し」が行われます。松明はその年取れた麦わらを直径50センチ程にわら縄で束ね、編みあげ、持ちやすい様に先端から1.5mほど縄を出したもので、松明の根元に火を点け縄を持ち威勢良く頭の上でぐるぐると回します。松明が真っ赤に燃えてパチパチと音をたて火の玉となって回り暗闇が炎と煙に包まれる光景は勇壮かつ幻想的で誰もが感動を覚えます。

このように貴重な伝統文化である「松明・松明まわし」を、地域青少年の健全育成を図ると共に、子ども達にも松明に使用する麦わら確保のため麦の栽培に関わって貰おうと、地元の西砂小、松中小の子ども達（5年生）と毎年10月、畑に種をまき、翌年6年生になった6月に、たわわに実った麦の刈り取りをします。今年で21回目の麦刈りです。初めて鎌を手にする子ども達は、蒸し暑い中、麦刈りに精を出します。最初は思うように刈り取ることができませんが、そのうち鎌の運びも上手になりサクサクッと心地よく、誰ひとりとして飽きることなく最後までしっかりと刈り取ります。子ども達の額には汗が光り、瞳は、農作業を成し遂げた達成感でキラキラと輝いています。お腹も空くので青少健・PTA（いずれも女性役員）が作った、ほうれん草やネギ、豚肉も入ったこの地域独特の糧うどんを参加者全員、畑に敷いたビニールシート上で車座になって食べます。中には2杯3杯とおかわりする子もいて畑で食べるうどんはまた格別ようです。ちなみに、うどんは昨年収穫した小麦で正に地粉うどんです。刈り取った小麦は7月の天気の良い日に脱穀、実は製粉し祭りですいとんにして食し、一部は乾麺（松明うどん）にし、種まきや麦刈りの際に食べます。肝心の麦わらは松明となり、市最大の祭り行事「よいと祭り」と地元の「松明祭」で回し、子ども達の汗と土にまみれた努力の結晶の炎として夜空を焦がします。勿論、「松明祭り」では、麦の栽培に携わった小学6年生以上の子供、若者、大人（何れも男女問わず）が「松明回し」を体験します。勇気を出し果敢に「松明回し」に挑戦した子どもはすでに400余名にのぼり、良き思い出となって未永く心に刻んでいることでしょう。ちなみに、我が園児も松明の伝承保存に毎年厳冬の2月に小さな足で「麦踏み」して一役買って？います。



種まき



麦刈り

このように園の子ども達のみならず地域の子もや気の合う仲間との関わりは、鎌や火を扱い非常に危険と責任を伴う活動ですが、私にとっては幸せの源泉で人生の糧であり、今ではライフワークとなっています。

そして、時季は今まさに麦刈りの麦秋、畑では立派に成長した黄金色の麦が今や遅しと待っています。今年も夏の祭りに向けて子ども達と心地良い汗がかければと思っています。